

I 経営の重点に関わること 評価段階(A:よくできている Bおおむねできている C:あまりできていない D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取り組み目標等)
いきいきと いっぱい 遊ぶ子	心を動かし 響き合う	園と保護者は、互いに“知らせたい”“知ってほしい”“話したい”“聞いてほしい”と思える関係になっている	<b>職員:A:49% B:46% C:5%</b> 保護者 A:74% B:24% C:0% D:2% ・園からの発信を意識的に言い、連絡事項だけでなく保護者に日々の子どもの様子を伝え、信頼関係を築いてきた。保護者からも子どもの成長や悩み等を遠慮せずと言える関係性もできてきた。今後も相手を知ろうとする姿勢を丁寧に継続していくことで、風通しの良い関係作りをしていく	B	B	【園】家庭との連携は多様な保護者がいる中で、家庭の背景に寄り添いながら関わろうとする園の姿勢は保護者にも伝わっている 【園児】お互いに嫌だった気持ちを言葉で伝えることが子ども同士できている 【職員】膝をついて園児と同じ目線で保育することが自然とできてる	・子どもの背景にある家庭環境や保護者の思いに寄り添い、丁寧な関わりを意識しながら信頼関係を築いていく。また悩みや相談だけでなく、日々の成長を喜んだり、かわいい姿を共有しながら、園も子育てのパートナーとして安心感のある関係作りを継続していく。 ・子どもが自分を大切に受け止めてもらっていると感じ、安心して園生活が送れるよう、保育者は子どもの仕草や表現の裏にある思いに心を寄せ、優しく、丁寧な関わりを大切にしていく。 ・子どもが葛藤したり、折り合いをつけようとしている姿を丁寧に見取りながら子どもの思いを尊重していく ・職員一人一人がいつでも“こどもをまんなか”の意識を持ちながら保育できるよう悩みや相談を気兼ねなく発信しながら、自分の思いと子どもの姿のズレの気付きをチャンスと捉え、関わりを振り返っていくことを大切にしていく
		園児は、人とつながる心地よさを感じ、支えられながら自分の気持ちに折り合いをつける経験を積み重ねている	<b>職員:A:49% B:46% C:5%</b> 保護者 A:52% B:42% C:4% D:2% ・一人一人の気持ちを職員が逃さずに捉え、言葉や仕草の裏に秘めた思いを受け止めながら安心して過ごせる場や関係を作ってきた。大人に支えられている安心感を土台にして自分の思いを十分に発揮しながら周りの状況に目を向け、気持ちを安定させる方法を自分なりに見つけて次の活動に向かう経験を重ねてきている	B	B		
		職員は、温かく優しいまなざしで“こどもをまんなか”にした保育をしている	<b>職員:A:54% B:41% C:5%</b> 保護者 A:80% B:17% C:2% D:1% ・子どもの育ちや興味・関心はどこにあるかをクラス担任間で話し合いながら日々の保育を行ってきた。互いに遠慮なく話し合える関係性もできたが、それまでの子どもの姿から、“こどもをまんなか”に思っている保育が、保育者の思い込みや先入観で子どもの姿とズレていることもあった。	B	A		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取り組み目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1) 0歳から小学校就学までの一貫した教育及び保育	集団生活における多様性や経験年数が考慮され、調和のとれた教育及び保育が行われている	<b>職員:A:56% B:44%</b> 保護者 A:76% B:21% C:2% D:1% ・職員は歳児の発達を理解したうえで、一人一人がそれまで経験してきたことや背景を理解し、その日、その時の瞬間の思いに寄り添いながら丁寧な関わりをしてきた。子どもの“やりたい”の思いを受け止めながら、クラス集団の一員として友達や保育者と一緒に生活を共に過ごし、個も大事、集団も大事にしながらバランスが取れるように関わってきた	B	B	【1(2)】こどもの“もっとやりたい”思いに職員が寄り添い、受け止めてもらう安心感の中で遊ぶ子ども達の姿があるのでAとする  【1(3)】遊びの豊かさや継続、発展を見据えた保育者の関わりにゴールはない。研修を積み重ね、保育者も一緒に遊びながら面白いがる気持ちを持ち続けほしい願いをもってBとする	・園児の発達やそれまでの育ちを理解しながら、歳児の発達をおさえ、一人一人に応じた関わりを大切にしていく。また個を大事にししながら、友達や保育者と繋がることや共に過ごす心地よさを味わいながら生活を積み重ねていけるようにする。  ・子どもが自分の思いや考えを発信し、受け止めてもらえる安心感の中で、思いを十分に発揮しながら遊びに向かう姿を積み重ねていけるよう、保育者は温かな関わりを意識していく  ・子どもの興味、関心を捉えた環境を作る中で、長期的な環境では「またやりたい」と繰り返し遊ぶ姿に繋げたり、瞬間的に発生する遊びを捉え、すぐに使えるよう準備し、提供する短期的な環境の両面を構成する。職員も子どもと共に面白がりながら遊びの盛り上がりや展開を予測しながら関わっていく。
	(2) 一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	年齢や季節に応じた遊びや生活の場があり、和やかな雰囲気の中で安心して気持ちで生活している	<b>職員:A:49% B:49% C:2%</b> 保護者 A:78% B:21% C:1% ・子どもが自分の居場所があり、好きな先生、好きな友達がいることで安心して過ごしている。保育者が季節に合わせた遊びの環境を用意し、子ども達は自分で使いたい道具を選び、やってみようという気持ちで遊びを楽しんできた。子ども達が遊ぶ姿を捉えながら環境を再構成するが、特に戸外遊びにおいてはタイミングが合わなかったり、継続した環境の提供ができないこともあった。今後も保育者も一緒に楽しさを感じながらどんなことが遊びが豊かになっていくのかを意識しながら関わっていく。	B	A		
	(3) 環境を通して行う教育及び保育	遊びが豊かになっていく配慮がなされており、発達に必要な様々な経験をj得ている	<b>職員:A:39% B:56% C:5%</b> 保護者 A:84% B:13% C:2% D:1% ・子ども達の興味や発達をおさえ、それまでの経験を考慮し、今、どんな遊びの環境を用意するかを予測しながら環境構成を行ってきた。その中で子ども達は自分で使いたい道具を選び、やってみようという気持ちで遊びを楽しんできた。子ども達が遊ぶ姿を捉えながら環境を再構成するが、特に戸外遊びにおいてはタイミングが合わなかったり、継続した環境の提供ができないこともあった。今後も保育者も一緒に楽しさを感じながらどんなことが遊びが豊かになっていくのかを意識しながら関わっていく。	B	B		
2 安全管理・指導	(1) 事故防止・防災	園児自身が危険を感じ、何を、どうしたらよいかを考えて生活する力が身に付く関わりをしている	<b>職員:A:37% B:63%</b> 保護者 A:57% B:37% C:4% D:2% ・遊びの中でケガに繋がらぬような行為があった時に、単に禁止や制限をするのではなく“なぜ危ないのか”“何が、どのように危険であったか”を丁寧に伝え“どうしたら良いか”を子どもと一緒に考えることで子ども自身が“自分事として”向き合えるような関わりを意識してきた。避難訓練においても、かたがらの体験や紙芝居を通して実生活に基づいた言葉のかけ方の工夫や問いかけをしながら自分で危険に気付ける力が身に付く経験を大切にしている。	B	B	【2(1)】YURETAの体験や警察と連携した不審者訓練等園児も職員も実体験は大事	・遊びの中で子ども自身が危険だと感じ、何を、どうしたらよいか考えたり保育者の見守りや立ち位置、言葉がけのタイミングや言葉選びを考えながら安全な遊びを保障していく。また災害時における危険や自分の行動について考えたり実践できるようにしていく
3 保健管理・指導	(1) 健康教育の充実	栽培・クッキング・買い物体験、見る・触る・味わう・香りを感じる等、多様な視点から食育を捉え、五感を刺激する食育活動が行われている	<b>職員:A:47% B:51% C:2%</b> 保護者 A:70% B:27% C:3% ・今年度より栄養士が配置されたことで給食時間に各クラスを毎日回りながら喫食状況の把握や食材・調理方法を子ども達に伝えたり、食育の日には様々なテーマに合わせた話をすることで苦手なものも「食べてみよう」という意欲や給食を楽しみにする姿に繋がった。またクラスで栽培した野菜のクッキング体験も“食べてみたらおいしかった”の体験にも繋がっている	B	A	【3(1)】自分達の給食を作っている人の顔がわかり給食室とのやりとりも食への興味・関心に繋がっているのでAとする	・日々の給食の時間の中で、五感を使い、感じる経験を積み重ねていく。栽培やクッキングにおいては時期を逃さず計画し、タイムリーな経験ができるようにしていく。年間を通じた栽培やクッキングの継続と共に日々の給食における食育活動を大事にし、食を通じた体作りを行っていきたい
4 特別支援教育・保育	(1) 支援体制づくり	特性の理解、アプローチや支援方法が共有され、誰もが同じ視点で支援、サポートできる体制ができている	<b>職員:A:37% B:56% C:7%</b> ・支援の会(パンダの日)を楽しみにし、一人一人のペースに合わせた活動ができた。また支援児の会(パンダ会議)を通して支援児担当者が、日々の悩みや支援方法の悩みを共有することで職員が一人で抱え込まずみんなで支援する意識が構築できた。今後、支援児の会の情報を全職員で共有することで更に幅広く、誰もが同じ支援ができる環境作りを意識していく。	B	B	【5(1)】大人が楽しそうにしている姿を子ども達はよく見ている、それも安心感に繋がっている。また職員同士が互いの事を大切に思い、感謝を伝えたり情報共有し合う風通しの良い関係が構築されていると考え、Aとする	・ぱんだの会、ぱんだ会議(支援児)において、特別支援コーディネーターを中心としながら、ひとり一人の特性を理解し、様々なアプローチや支援方法を話し合いながら誰もが同じ視点で支援、サポートできる環境作りを強化する
5 組織運営	(1) 組織体制の充実	自分事としてきちんと向き合い、理解し、お互いを大切にしようという関係が構築されている	<b>職員:A:41% B:59%</b> 保護者 A:56% B:36% C:7% D:1% ・職員自身の悩みや困りごとを気兼ねなく発信し、受け止めてもらったり、自分が発信した事に関わった職員へ感謝を伝えたりする事を意識したことで、お互いを信頼し合える職員集団ができてきている。時に時間に余裕がなく人任せになったり、丁寧に欠けることもあった。職員集団が円滑になることで子ども達への関わりにも余裕が持てるとうことを引き続き意識したい。	B	A	【6(1)】職員が自分達で必要な教材研究を考え、研修を重ねながら用具や遊具について学びその学びを保育に活かす環境作りをしている為、Aとする	・職員自身が“やってみよう”“おもしろい”と感じる感性を磨き、子どもの遊びがより豊かになるための手だてを積み重ねていく。教材の使い方には何通りもあることを知り、自分で試したり、他の職員に聞いたりしながら自分自身の引き出しを積み重ねていく
6 研修	(1) 研修体制の充実	用具や道具に使い方、素材の特性等、知識を広げ、遊びがより豊かになるための教材研究を行っている	<b>職員:A:44% B:56%</b> ・月1回研修主任が中心となり教材研究を行ってきた。職員が教材の使い方や応用方法を知り実際に体験することで新たな知識となり、子ども達の遊びに応じた実践を重ねてきた。保育における教材は多岐に渡るため、どんな教材を、どのように、どのタイミングで提供するのかが今後学びが必要である。	B	A	【8(1)】保護者は子どもが園で何をしているのか全てが気になる。その思いをきちんと受け止め、園からの発信を丁寧にしているためAとする	・ドキュメンテーションの作成において、時数制限があり、伝えたいことが十分に配信できないこともある。ドキュメンテーションだけでなく、保育によっては紙媒体の発信やコードモンの活用などを検討し、保護者にとって“読みたい”“知りたい”発信となるような工夫をしていく
7 教育・保育環境整備	(1) 教育・保育の充実	意図をもって環境を構成し、最後まで遊びを見取り、物が落ちていないか、片付け忘れがないか確認している	<b>職員:A:24% B:66% C:10%</b> 保護者 A:60% B:35% C:3% D:2% ・子どもの気付きを捉え一緒に面白がったり、見守ったりしながら保育者も環境の一つとして関わってきた。園庭の環境において全学年が同じ時間帯で遊びが展開するため、担任の意図とはズレが生じる場面もあった。また遊びの最後まで捉えられず遊びが中断することで遊びの場が乱雑になったりその場に誰もいない状況になることもあった。子どもに片付けの声掛けをすると共に職員も一緒に片づける姿を見せることで、子ども自身も最後まで片づけようとする姿が身に付きつつある。	B	B	【10(1)】地域防災など子どもが参加すれば親も参加する。何かあった時にお互いの顔がわかる関係を地域	・子どもの興味や関心を捉えタイミングを逃さず環境を構成し、遊びに応じた再構成を丁寧に行っていく。引き続き、子どもが使いやすい片付けやすい環境にも心を配り、場に必要な準備をする
8 家庭との連携・協力	(1) 家庭教育への支援機能の充実	行事の様子を全家庭に配信し、他学年の取り組みを知らせ、園への関心を広げている	<b>職員:A:51% B:44% C:5%</b> 保護者 A:76% B:19% C:4% D:1% ・日々の保育の様子をドキュメンテーションで配信する際、1週間の中でクラスの子ども全員が必ず配信できるようにしてきた。また行事の際には他学年の様子も入れた内容を配信した。保護者の関心も高まってきたが、未読家庭もあり、個別の働きかけも同時に必要である。	B	A	【10(1)】地域防災など子どもが参加すれば親も参加する。何かあった時にお互いの顔がわかる関係を地域	・年長児が中心となり、入江小、浜田小学校の訪問をした。更に自園から積極的に発信して出かけることで、学校訪問がき、長期的な接続を目指す。また全園児が地域の小学校や施設に向かう機会を持つようにする
9 近隣の学校との連携	(1) 近隣の園との連携の推進	自園から積極的に発信しながら交流を継続し、長期的交流においての育ちを明確にしている	<b>職員:A:34% B:59% C:7%</b> 保護者 A:66% B:29% C:4% D:1% ・浜田小学校の運動会に向けた授業の参観や入江小学校の年長児交流、杉の子保育園との交流の継続ができていた。また今年度はめぐみこども園を訪問し年長児の交流も行った。対象学年だけでなく、どの学年においても散歩に出かけ地域の学校や施設があることを知ったり、交流を継続するためには自園からの発信を計画的に行う必要を感じた。	B	B	【10(1)】地域防災など子どもが参加すれば親も参加する。何かあった時にお互いの顔がわかる関係を地域	・遊びリレーション訪問・子育てトークの会参加・もぐれんの会を訪問しお年寄りや「かたまたたき」のふれあい遊び、未就園児に歌の披露を継続して行い、地域にある交流の場を今後も大切にし、交流が入江こども園にとっての文化としていく
10 地域との連携	(1) 信頼される園づくり	遊びリレーションもぐれんの会等、地域行事に参加したり、地域に出かけたりして交流を行っている	<b>職員:A:59% B:34% C:7%</b> 保護者 A:66% B:29% C:4% D:1% ・継続した交流をしてきたことで、子ども達の訪問を楽しみにして下さっていたり、近所の方から声をかけてくださり好意的に子ども達のことを受け入れて下さる環境がある。交流に出かける学年を同じにしたことで子ども達も“次に行くときは〇まるがしたい”と訪問を楽しみにする姿もあった。	B	B	【10(1)】地域防災など子どもが参加すれば親も参加する。何かあった時にお互いの顔がわかる関係を地域	・遊びリレーション訪問・子育てトークの会参加・もぐれんの会を訪問しお年寄りや「かたまたたき」のふれあい遊び、未就園児に歌の披露を継続して行い、地域にある交流の場を今後も大切にし、交流が入江こども園にとっての文化としていく